全国
硫黄島
いおうとう
とうみんのかい
会報

通巻 第2号 2022年発行
発行 全国硫黄島島民の会
編集 島民三世の会
My Roots is Iwoto Islands.

二〇二二年、最新の《硫黄島》をお届けします。

別の角度から見た海底噴火部分。
今回は水蒸気噴火ではなく、マグマの噴出を伴う
海底噴火の可能性がある。約1,000年ぶりとのこと。

摺鉢山頂上から南海岸方向。浜から900メートル沖にて海底噴火を繰り返している様子が見れる。2022年（令和4年）8月2日撮影。真夏の硫黄島。

摺鉢山（すりばちやま）沖より、おがさわら丸デッキにて。また上陸しての墓参が叶うことを祈り慰霊しました。三世の会より会長、副会長が参加。

小笠原村主催《硫黄島墓参》が開催されました

―今年の《硫黄島墓参》に参加した会長・西村より

今年六月、小笠原村主催による硫黄島訪島事業が開催されました。私は二〇一六年に参加して以来、六年ぶりになりました。コロナ禍の中で訪島事業を開催していただいた小笠原村をはじめ関係皆様には今回も大変お世話になり、有難うございました。

今年の墓参では、硫黄島への上陸はなく硫黄島の周りを二周してその間に洋上慰霊祭を行う行程でしたが、今回は様々な方々とお会いする機会がありました。小笠原村議会の杉田議員の計らいにより、渋谷村長をはじめ村役場の方々、教育長の桐川先生とお話する時間を設けていただいた他、船内では硫黄島協会、父島在住硫黄島旧島民の会の皆さんとも交流することができました。

色々なお話をしましたが、特に世代交代、硫黄島の歴史、小笠原諸島のことをどうやって世間に広めるか、というのが共通の認識となっています。三世の会でもこれらの問題を念頭に活動を進めていきたいと考えています。

世代交代という意味では、若い世代への伝承が重要となってくると思いますが、この硫黄島訪島事業では毎回小笠原中学校、母島中学校の生徒さんも参加されます。今回は、小笠原高校の生徒さんも加わり、一〇〇名近い生徒さんが乗船していました。このような墓参事業に参加するということは、事前に硫黄島のことを勉強するのだろう、とは思っていましたが、本当に熱心に硫黄島のことを学んでおり、感心しました。

硫黄島は、戦前の暮らし、戦時中の強制疎開、戦後の問題など、諸問題が複雑に絡み合っている特殊な状況の島ですが、きちんと整理して考えている生徒さんが多いのです。生徒さん達が素晴らしいのはもちろん、このような教育の場を設けている小笠原の学校、教育委員会の熱意ある取り組みを感じることができました。

さらに、硫黄島訪島事業では小笠原村役場の方々にいつも大変お世話になる訳ですが職員も若い方々が増え、硫黄島のことを勉強する機会と捉えておられ、大変心強く感じました。是非、今後共よろしくお願いいたします。

全国硫黄島島民三世の会会長　西村怜馬

2016年、硫黄島墓参・父島にて

にしむら・りょうま
二〇一八年より
全国硫黄島島民三世の会会長。
一九八二年生まれ。
祖父・菊池耕一（島民一世）、
祖母・菊池康子（島民一世）の孫。
東京都出身・在住。

―遠ざかる硫黄島―

復帰後も軍事施設が自衛隊に引き継がれ、また火山活動による土地の隆起などを理由に、一般の方の定住（旧島民の帰島）は許されていない。

硫黄島への上陸が許されるのは墓参・慰霊事業のみ。その、貴重な時間さえも、おがさわら丸の大型化、コロナの蔓延と続き、二〇一六年六月を最後に上陸可能な墓参・慰霊事業が行われていない（東京都主催自衛隊機での墓参は除く）。

硫黄島沖での洋上慰霊祭が二〇一八年以来四年ぶりに二〇二二年六月に開催された。

2016年7月に新しくなったおがさわら丸

北硫黄島沖を飛ぶカツオドリ　撮影：西村

戦前2つの集落に最大200人が生活した北硫黄島

旧島民を対象とした硫黄島墓参事業

現在、旧島民を対象とした硫黄島墓参事業は小笠原村が主催しているものと、東京都が主催しているものの2つがあります

＊1世：硫黄島で産まれた世代　2世：1世の子　3世：1世の孫

	船での墓参	自衛隊機による墓参①	自衛隊機による墓参②
主催担当	小笠原村	東京都総務局・行政部振興企画課	
硫黄島での泊数	1泊	1泊	日帰り
開催時期	毎年6月	毎年10月頃	毎年2月頃
渡島の方法	父島への定期船 「おがさわら丸」を利用 東京ー父島ー硫黄島	自衛隊機 入間基地ー硫黄島	自衛隊機 入間基地ー硫黄島
参加基準	1世～3世 （4世も実績あり）	1世、1世の配偶者、兄弟姉妹、2世、付添で3世 2世、3世の配偶者など	1世～3世
近年の実施	2022年6月 上陸せず洋上慰霊祭	2022年10月 1泊ではなく、日帰り	2020年2月
メリット	・島に1泊できる、郷帰りの時間がある	・島に1泊できる、船と比べ移動時間が短い	・船と比べ移動時間が短い

追　悼

森下一男前村長

2021年7月29日、森下前村長がご逝去されました。
5期18年に渡って小笠原のリーダーとして、硫黄島も含めご活躍されました（お母様は硫黄島出身者）。
謹んでご冥福をお祈り致します。

2018年墓参時の写真。三世の会もお世話になりました。

川島フサ子さん

（上）硫黄島（下）奥山登喜子さんと三世の会

奥山登喜子さん

聞き取り

《硫黄島》に暮らした一世から当時の話を聞いています

戦後八〇年も迫る中、当時を知る方々の生の言葉を聞く機会も減る一方かと思われます。

全国硫黄島島民三世の会では、活動の柱として歴史を伝え、次世代へつなぐことを目的に、島民一世への聞き取りを行っております。

この二年は、コロナ禍で直接お会いすることもままならない中でしたが、お二人から貴重なお話を伺うことが出来ました。

一人目は川島フサ子さん。副会長羽切朋子の祖母で、硫黄島では一六歳まで生活をしており、各家庭、学校や集落の様子を細かくお話くださいました。

お二人目は奥山登喜子さん。奥山さんも二二歳まで生活しており、料理が得意なお父様が作る美味しいごはん、島で貴重な水をどのように蓄えるか、など興味深い話ばかりでした。

国が戦争に進んでいく当時、暗いイメージを抱きがちですが、お二人ともに鮮やかな記憶で豊かで楽しい島での思い出の数々を聞かせてくださいました。

現在も世界で続く戦争についても大変憤りを感じてらっしゃる姿が印象に残りました。（羽切）

【インフォメーション】

1　11月16日明治学院大学国際平和研究所 / 全国硫黄島島民三世の会主催によるシンポジウム「帰れない遺骨 帰れない島民―硫黄島の歴史・現在・未来を考える―」が行われました。

2　小笠原村が発行する「村民だより」に、三世の会が実施した「島民一世への聞き取り」より抜粋して「続・小笠原の今と昔」として掲載されています（2022年9月号より、月1回）。

3　三世の会より副会長・羽切が遺骨収集にはじめて参加しました。詳細は次号お伝えします。

1

2

3

4

資料、情報求む！硫黄島に関することでしたら何でも。

ご自宅にございます《硫黄島》に関する文献、写真、映像等どのような情報でも構いません。
現在、『全国硫黄島島民三世の会』では、歴史を風化させないために、貴重な情報を収集し、デジタル・アーカイブ化も含め、次代へつなぐ活動に取り組んでいます。

4 島民二世 小俣耕一様とご家族よりお預かりした資料。

会員募集！『全国硫黄島島民三世の会』

祖父母の世代が「硫黄島旧島民」でいらっしゃる孫の世代＝三世の皆様へ。2018年に発足致しました『全国硫黄島島民三世の会』では会員を募集致しております。共に学び、語り合い、いつの日か一緒に硫黄島を訪れたい。事務局（電話 047-458-3615、islandvideo1976@gmail.com）まで。お待ちしてます。

全国硫黄島島民の会会報　通巻第２号　2022年11月　発行：全国硫黄島島民の会　編集：全国硫黄島島民三世の会　デザイン：アイランドビデオサービス

500ページ超の誌面に、
父島や硫黄島の生活・場面がリアルに描かれている。
そして今と昔、時空を超越した自由な表現がすごい。

海を眺め、島を思う

硫黄島島民三世でもある小説家・滝口悠生さんが《硫黄島》を舞台にした
小説の連載をスタートしたのが2019年7月。
今年の夏、ついに1冊の本にまとまりました。

『水平線』
滝口悠生
（新潮社）
2022年7月25日刊行

文◎滝口悠生（小説家・全国硫黄島島民三世の会）

『水平線』は硫黄島を舞台にした小説ですが、よく知られる激しい戦闘のことはほとんど書いていません。その代わりに、戦争によって強制疎開となる前の、島の景色や、そこで暮らしていたひとびとの生活の様子をたくさん書きました。

島に戦禍の及ばぬ頃、精糖業や農業、漁業などを営みながら豊かで平和な生活を送っていた島民たちのなかには、若き日の私の祖父母やその家族もいました。強制疎開に際し、祖父の弟は軍属として島に残り戦死しました。祖父は疎開時に出征して島を離れていましたが、兵隊に出ていなければ島に残ることになったのは祖父だったのかもしれません。

自分のルーツが硫黄島にあることはなんとなく知っていましたが、そのことに私が関心を持って墓参に参加したり島のことを調べたりしはじめたのは二十歳を過ぎてからで、今となってはとても残念ですが、生前の祖父母や親類から直接硫黄島のことを聞く機会もほとんどありませんでした。

小説家になってから、いつかは硫黄島のことを小説に書きたいという気持ちがずっとありましたが、自由に取材に行くこともできず、当時を知る人も少ないなかで、なかなか書きはじめることができずに何年も時間が過ぎてしまいました。

それでもえいやと腹を括ってこの小説の連載をはじめたのですが、実は連載時にはこの小説は「水平線」というタイトルではなく、「全然」という少々変わったタイトルが付けられていました。

「全然」は否定や打消、つまり「ない」と結びつく副詞です。その語をタイトルにしたのは、硫黄島を「誰もいなくなってしまった」「何もなくなってしまった」場所と捉えてのことでした。けれど、連載が終わって本にまとめるにあたり「水平線」と改題することにしました。小説を書き進めるに従って、硫黄島が「誰もいない」「何もない」場所だとは思えなくなってきたからです。いまは自由に島を訪れたり、島の景色を眺めることはできないけれど、かつて島に暮らしたひとにとって島はいつまでも「家族や友人たちがいる」場所であり、「毎日の暮らしがある」場所なのだと思うようになりました。

内地からは、遠く離れた硫黄島の島影を見ることはできません。見えるのは水平線だけです。でも、島を思えば海を眺め、海を眺めれば島を思う。そのとき、かつての島の生活を知るひとの目には、島の暮らしや島の景色が、そこにいた人々の姿が見えるのではないか。「水平線」という題名には、そのような意味が込められています。

たきぐち・ゆうしょう

小説家。1982年東京都八丈島生まれ、埼玉県育ち。
2011年「楽器」で新潮新人賞を受けデビュー。
2016年『死んでいない者』で芥川賞。
著書に『ジミ・ヘンドリクス・エクスペリエンス』『茄子の輝き』『高架線』など。

総会 年に一度の《硫黄島》同窓会

写真・渡邉英昭

全国硫黄島島民の会では、毎年一回、九月に川崎にある川崎日航ホテルにおいて「定期総会（島民の集い）」を開催しています。

この集いは硫黄島に関係する情報を共有する総会や旧島民の憩いの場として、硫黄島で暮らしていた世代をはじめ、その子孫（二世・三世）や硫黄島関係者を中心に、硫黄島の昔話に花を咲かせ、島に想いを寄せる時間を過ごしています。

はじめは、同窓会として開催していたこの総会は二〇二一年で五一回目となりました。ここでは、「昨年の第四九回、昨年の第五〇回、第五一回の総会の様子をご報告します。

まず、近年のコロナ禍が続く中、第四九回（二〇二〇年度）、第五〇回（二〇二一年度）、第五一回（二〇二二年度）と無事に総会を開催することができました。これは、スタッフの努力もありますが、総会にお越しくださった関係皆様のご協力あってこそだと思っています。どうも有難うございます。

第四九回は、感染者の増加を受けて十一月に延期した上で規模も縮小した中で開催し、戦後七五周年ということで慰霊祭をとり行いました。

さらに、昨年は第五〇回の節目となり、会場では戦前の硫黄島の暮らしを撮影した写真を展示するミニ写真展を開催しました。この写真の中には、運動会、農業、野球、相撲など、戦前の豊かな暮らしぶりが伝わってくるものの他、島で唯一の旅館「太平館」の記帳を撮影した貴重なものも展示し、好評を得ることができました。

そして、今年、第五一回の集いでは青年会議所様と三世の会のコラボで、硫黄島の様子をVR（バーチャルリアリティー：仮想現実）で再現した映像のパイロット版を展示し、参加された皆様に御覧いただきました。

今回のVR映像は、硫黄島の中心付近にある「硫黄ケ丘」を再現したもので、今後、島内の他の場所にも拡大していこうとしています。

昨年、今年と無事に集いを開催することができましたが、今後、この集いの運営を徐々に三世の会へ移していくことになります。

不慣れな面も多々あるかと思いますが、今後共よろしくお願いいたします。（西村）

1 ゴーグルの向こうは《硫黄島》！VR映像をお披露目しました。
2 総会名物・戦前の《硫黄島》立体地図
3 滝口悠生さんの名物・寅さん（左）
4 滝口悠生さんのサイン会も行われました。
5 来年も川崎日航ホテルでお会いしましょう。